

## 信州大学の日本語研修コースへの提言

佐藤友則

キーワード：未習の専門用語、聴解の困難さ、人間関係のよさ、インフォーマル表現、主教材の修正

### 要旨

日本語研修コースの修了生を対象に、学習面、生活面に重点をおいて追跡調査を行った。その結果、「未習の難しい単語があると話全体の聞き取りができなくなる」、「日本語で発表しようと努力している」、「どれだけ日本語を勉強しても専門には生かせない」などの他、聴解の困難さ、読み・書きにおける漢字の問題などの意見を聞くことができた。そして、この調査結果などをもとに、研修コースにどのような日本語指導が必要かを考察し、①インフォーマル表現指導の重要性 ②主教材の修正利用の2点を提言した。

### 1. 研究の目的

1999年4月に信州大学留学生センターが発足し、10月に第1期の日本語研修コースがスタートしてから、すでに3年以上が経過した。この間に日本語研修コースは着実に歩を進め、現在は第7期が進行中である。第7期と第1期を比較すると、多くの点で変化が見られる。そして、それらは後退ではなく、進歩と考えていいものである。その進歩のために大きく寄与してきたのが、日本語研修コース（以下、研修コースまたはコースと記す）担当の教員同士の積極的なディスカッションである。コース中またはコース修了時の学習者の習得状況や直面している問題点などを観察し、それらをもとに様々な議論や提言がなされ、それをもとにコースの修正がされてきた。

さらに、より恒常的なコースの質的向上のために開始されたのが、研修コース修了生への追跡調査である。これは、コースが修了し、修了生がそれぞれの学部・研究科に配置されて7～10ヶ月ほど経過してから、アンケートおよびインタビュー調査を行っているものである。この調査は、本稿執筆者の他、留学生センター教員5名で追跡調査グループを結成して行っているものである。この調査の目的は、修了生の学習面および生活面での現状把握を行い、修了生がどのような状況にあるかを知ること、現在の研修コース受講生への日本語指導に反映させていくことである。修了生が現在も大きな問題と感じていることが、コース受講中に指導可能なものであれば、それを重点的に指導していきたい。逆に、負担に感じていない、または使用することが稀である項目があれば、その指導について再考すべきであろう。この追跡調査を通じて、研修コースでの日本語指導を改めて客観的に

見なおし、その質をより向上させていきたいと考えている。

本稿では、今までに4回行われてきた追跡調査のうち、2001年前期に受講していた修了生を対象に行ったインタビュー調査について論述していく。そして、この調査結果などをもとに、今後の研修コースの向かうべき方向はどのようなものが提言していきたい。

## 2. 調査の方法

### 2-1. 調査対象者

調査は、2001年4月から9月まで研修コースで日本語を学習していた4名の学習者を対象に行われた。この期には5名の受講者が在籍していたのだが、1名はすでに帰国しているため、インタビュー可能な4名を対象にした。4名のうち3名は非漢字圏からの学習者で、コースの開始時点では日本語のほぼ未習者（以下、ゼロ学習者と記す）であった。

残り1名は漢字圏の学習者で、開始時点では初中級レベルであった。本稿では、ゼロ学習者3名をそれぞれA1、A2、A3と記述し、初中級学習者をB1とする。

研修コース在籍中、A1、A2、A3は、『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』で文法・語彙および会話を学習し、50課まで修了した。また、『Basic Kanji Book vol. 1』で漢字を学習し、20課まで進んだ。この他に、発音・作文などの授業を受けていた。3名とも、修了時点で、まだまだ不十分ではあるが日本語を用いてコミュニケーションできる能力を習得していた。一方、B1は、『みんなの日本語Ⅱ』を修了後、『新日本語の中級』で文法や会話などを学習した。漢字は『Intermediate Kanji Book vol. 1』で学習した。この他、作文・ビデオなどの授業があった。B1は、修了時点で、日本語でコミュニケーションはできるがミスも多く、スムーズな会話は難しいレベルであった。この4名は、上記の文法・会話や漢字などの授業のほか、日本人学生にインタビューしてその結果を発表する、日本人を招いてパーティーを開く、自分の専門や自国について日本人招待客の前で発表するなどの活動も行った。この活動では、学習者たちが教室を離れ、生の日本人を対象にした日本語使用の場を経験させることを目的としていた。

### 2-2. 調査内容

調査は、本来はインタビュー調査の前にアンケート調査を行い、アンケート結果を見ながらインタビュー調査を行う予定であったが、調査者・修了生との日程調整などに手間取ったため、予定を変えて行われた。まず、修了生の現況、特に研究・勉強面と生活面に焦点を当てたインタビューが個別に行われた。そして、インタビューの順番待ちの時間を利用して、研修コース在籍中の感想についてのアンケートを記入させた。本稿では、上述したインタビュー結果を中心に記述していく。

### 2-3. 調査時期および場所

インタビューは、研修コースでの学習が修了して約10ヵ月後の2002年7月14日に行われ

た。修了後10ヶ月の時間をおいたのは、修了生が所属の学部・研究科に慣れるまでにその程度の時間を要するのではないかと考えたためである。修了生達は、コース修了後、それぞれ3つのキャンパスに別れて研究・生活しているが、このインタビューのために信州大学松本キャンパスに集まってもらった。

調査の場所は、留学生センターの演習室1とコンピューター室で、修了生1名ずつ行った。インタビュー担当者は5名で、演習室1に3名、コンピューター室に2名が入り、修了生毎に主担当者を決めて行った。所要時間は、一人当たり30分から40分程度であった。インタビューは、時折英語が使用されることもあったが、基本的に日本語で行われた。

### 3. 調査の結果

#### 3-1. 研究・勉強について

①講義やゼミを受けているか。その講義やゼミの中でどんなことをしているか

A1: 講義は受けていない。ゼミは2週間に1回参加している。

A2: 講義は週1回受けている。時々、集中講義もある。ゼミも週1回で、毎週3人くらい発表する。他に週1回、外書講読があり英語の論文を読んでいる。それは、すぐに理解できるが、日本語に翻訳するのに時間がかかる。ただ、科学論文の書き方は日本語も英語もほとんど同じで、文法や単語などをよく覚えられるので、いい勉強になっている。

A3: 講義を4つ受けている。先生によってやり方が違う。授業前に資料を配ってくれる先生の場合、それを見ながら受講している。ドリルなどは学生に考えさせる先生もいる。講義は日本語で行なわれるので、ほとんど分からない。授業後に日本人の友達に教えてもらっている。絵などがあれば理解しやすい。しかし、専門用語など、重要な単語が分からないと、その文全体の意味が分からなくなることが多い。日本語の問題で、このことが一番大きい。ゼミは週1回ある。自分の研究で進展があった人が、それについて発表する。先生と専門について話しあう時は英語を使っている。

B1: 講義は4つ受講している。スライドなどを使うこともあるが、ほとんど日本語のみだ。専門用語は英語のこともある。ただ、一部の研究室は英語で講義を行っているようだ。ゼミは週1回で、実験のレポートや論文講読をする。全て日本語で行う。月1回発表が回ってくる。論文を読んで発表するのだが、一ヶ月位前から準備している。英語の論文を読んで、日本語の似た内容の論文を探して、その中の表現を利用する。日本人に分かるように発表するのは、とても難しい。

→全学習者がゼミを、ほとんどの学習者が講義を受講している。専門用語に関する意見が多い。A3の、重要な単語が分からないと文全体が分からなくなるという指摘は興味深い。

②講義やゼミでは日本人と同様のことをしているか

A1: ほぼ同じだ。ただ、日本人学生は月1回の発表だが、自分は希望して2週間に1回発表している。日本語のいい勉強になるためだ。

A2：日本人と同じことをしている。

A3：講義・ゼミ・レポートは日本人と全く同じだ。特別な配慮はない。ただ、レポートを英語で書いてもいいという許可が出たら、英語で書く。周囲はみな日本人で、日本語のみでやりとりしているので、研究室の他の人が何をしているか理解するのは難しい。

B1：日本人と留学生は全く同じ条件で受講している。実験に関する講義が多いので、それほど困難さはない。卒業時の発表は日本語でも英語でもいいので、英語で行う予定でいる。

→日本人とほぼ変わらない点は4名共通している。A3のように、周囲の状況が分からず不安を感じている修了生もいる。一方、指導教官から、英語での発表または論文執筆に関する許可を得ている修了生が多く、それは精神的安定につながっているのではないか。

### ③講義やゼミでの聴き取りはどうか

A1：他の人はいつも日本語でやりとりしている。自分は、全部は聞き取れないが、言っている内容は分かる。興味を持った内容については、話した人に後で詳しく聞いている。皆、とても親切に答えてくれる。

A2：先生によって異なる。分かりにくい先生だと20%程度しか理解できない。以前勉強したことがある内容は分かるが、新しい内容で難しい言葉が使われると分からない。そういう際は、日本人の学生が教えてくれる。先生には恥ずかしくて聞けない。

A3：講義では、重要な用語が分からないと文全体の意味が分からない。ゼミでは、日本人学生の発表は大体わかる。日本人学生が私と話す時は分かりやすい表現を使ってくれるのでいいのだが、日本人同士の会話の理解は難しい。

B1：講義もゼミも大体分かる。講義は資料があるので、インターネットなどで調べている。ゼミは同国人の助手に助けをもらうことが多い。この研究室には同国人の留学生が多く、日本人学生も留学生に慣れていて、自分達が日本語を間違えても理解してくれる。

→ゼロ学習者だった3名は、聴解の困難さをあげていた。重要な内容だと考えた際には、後ほど話し手に確認している点も共通している。A2の、既習事項なら理解できるが、未習で難しい語彙が使われると理解できなくなるという意見は、注意すべき点である。

### ④日本語の論文・レポートを読むか

A1：日本人の発表のレジュメは、漢字が書いてあるのでよく分からないが、興味がある内容については、チューターが翻訳してくれる。チューターは、とてもよく手伝ってくれる。自分では英語のテキストを読んでいるので、日本語で論文を読む問題は少ない。ただ、他の人と話すうちに、専門用語は覚えてきた。

A2：論文は読まなくてもいい。ただ、同じ研究分野の先輩のレポートを読まなければならない。同じ分野だが、それはまだ難しい。結果やグラフなどは理解しやすくいい。発表のハンドアウトなどは日本語だが、情報を少し取り入れるだけで本当には理解できていない。自分の専門用語の語彙が少なく、漢字を読めないことが問題だ。内容をいつ

も他の人に聞くのは大変なので、本当に重要な内容以外は分からないままにしている。

A3：読めない。漢字もあって難しい。大切だと言われた論文は、PCの翻訳ソフトを使って読むこともあるが、あまり役立たない。自分の専門は英語の論文を読めばほぼ十分だ。

B1：日本語の論文も英語の論文も毎日読む。日本語のものを読む時、カタカナに困っている。そこで、カタカナの専門用語辞書で調べることが多い。

→漢字圏のB1をのぞく3名が、漢字を読解上の大きな問題要因として取り上げている。漢字を自力で理解することはかなり難しいようである。翻訳ソフトも、現状では、専門の論文にはあまり有用ではないとしている。

#### ⑤日本語で論文を書くか

A1：書かない。自分が英語で書いた論文の要約を、先生が日本語に翻訳してくれる。日本語で書きたいと思うが、時間がかかるので、英語で書いてしまう。本当に数回だけ、日本語のレジュメを書いたことがあるが、それもほとんどチューターが書いてくれた。

A2：修士論文は英語で書くが、要約は日本語で書かなければならないかもしれない。外書講読の授業では、日本語で翻訳を書いていた。Eメールでは、友人と日本語でやりとりしているが、それは本当の日本語の作文じゃない。漢字変換をしてくれるのでPCは楽だ。漢字は、読んで理解できるものもあるが、自分では書けない。

A3：まず無理だ。修士論文は英語で書いてもいい。

B1：論文はまだだがレポートはよく書く。実験でいいデータが出た時は、その都度書く。実験のレポートは箇条書きで書けばいいので楽だが、講義のレポートは自分で内容をまとめなければならぬので難しい。書いてから日本人学生に修正してもらうつもりだ。

→初中級レベルから研修コースをスタートしたB1のみ、日本語でレポートを書いている。しかしそのB1も、論文は難しいと述べており、ゼロ学習者だった3名は英語で論文を書く予定でいる。

#### ⑥発表は日本語ですか

A1：できるだけ日本語でしているが、全部はできないので英語も使っている。先生や学生にも英語が分かる人が多いが、両方使おうとすると混乱するので、日本語を使っている。また、日本人学生にも、日本語で発表してほしいと頼まれている。今後、学会発表もする予定だ。それも日本語で発表するが、スライドは英語で作る。発表は、日本語のとてでもいい勉強になっている。

A2：以前、日本語と英語の半々で行ったことがある。結果は、日本語で言うのと弱くなってしまうので英語で言った。ただ、先生以外の参加者は英語で発表すると分からない。他の人の発表は全て日本語のため、少々難しい。今は日本語で発表している。原稿は自分で書いて、発表前に先生に見てもらって修正してもらう。自分は話し言葉で書いていた。話し言葉と書き言葉との区別は難しい。自分への質疑応答の日本語は、ほぼ分かった。しかし、他の人の発表については、内容がよく分からないので質問することはできない。

ただ、スライドがあれば分かりやすい。英語での発表はよく分かるし、質問もした。

A3：何度か発表している。基本的には日本語での発表だが、専門用語は英語を使っている。

B1：学会発表はまだないが、ゼミでの発表は日本語でしている。国内の学会発表は日本語で、国外では英語で発表する。今後、日本で学会発表する可能性はある。留学生の友人が国内で発表した際、日本語の原稿を書いて発表したのが、質疑応答は教授がしていた。→日本語で発表しようと努力している様子がうかがえる。日本人学生から日本語で発表するように依頼されるという意見は、多くの留学生から聞くことである。A1の「発表は日本語のいい勉強になっている」という意見は注目される。

#### ⑦日本語の勉強を続けているか

A1：チューターと続けている。毎日、専門用語5つとそれを使った文をチューターに提出している。生活の日本語は自分で努力している。

A2：自分一人で続けている。日本語の先生に紹介してもらった本で勉強している。ただ、今は時間がないのであまりしていない。友人に、日本語の分からないところをよく聞いている。専門用語は外書講読の時間に覚える。研究室には英和の科学用語辞典がある。ただ、自分の電子辞書でたいてい間に合う。

A3：日本語補講を受講している。しかし、授業が始まって時間が重なったり、中間発表のために大変になってきたので、あまり行かなくなった。自主的な学習はあまりしていない。今からどれだけ日本語を頑張っても、専門で使えるようにはならないと思う。

B1：専門で使いながらの勉強と、単語帳作成くらいしかしていない。

→日本語の授業を受け続けている学習者はほとんどいない。専門の研究をしつつ、自分に必要な日本語を身につけようとしているようだ。しかし、A3の「日本語学習を頑張っても専門には使えない」という指摘は非常に重要である。

### 3-2. 生活について

#### ①周りの人とのコミュニケーションは日本語で行っているか

A1：日本語で行おうと努力している。最初は日本語が下手だったので、周囲の人との関係がよくなかった。しかし、次第に日本語で関係を持つようになって、友達も増えた。日本語で困ることもあるが、ほぼ大丈夫だ。分からない時は、友達に聞いたり、ひらがな・カタカナ版の電子辞書で調べたりしている。

A2：生活についてはあまり困ることはない。先生も友達のような気さくな人でよかった。丁寧な言葉を使わなくてもよく、何でも気軽に聞くことができる。ただ、専門のことは日本語では話せない。今は、6人くらいの人に自分の母国語を教えている。だいたい日本語で教えているが、少し英語も使う。とても楽しい。

A3：全て日本語だ。生活面では日本語を使いたい。しかし、相手が自分の日本語を理解してくれないことが多い。指導教官と専門について話す時や、本当に困った時は、英語

が話せる人を探して英語で話す。先生も忙しいので、専門分野の日本語を教えてもらいたいとは思わない。

B1：指導教官および日本人学生とは日本語と英語で、同国人の助手および留学生とは日本語と母国語で話している。指導教官は早く話すので、初めは全然分からなかった。先生にゆっくり話してくださいと言いくいので、先生の話の後で、助手や他の留学生に説明してもらっている。

→できるだけ日本語を使おうと努力している様子がうかがえる。A1の、日本語を使うようになって友人が増えたという意見は重要である。友人が増えることで精神的安定が増し、研究にも好影響をもたらすことが予想される。全体的に人間関係に恵まれている修了生が多いようだ。

②大学内・大学外の事務手続きは日本語か。困っていることはあるか。

A1：日本語だ。ほとんど一人でしている。作文する時は、友達に修正してもらう。

A2：大学内・学外とも日本語で行っている。学内のことは、ほぼ自分で分かる。学外では、引越しなどは先生と一緒にしてくれた。日本語では全然分からなかった。住み始めた時も先生によく助けてもらった。自分一人では絶対に無理だ。

A3：大学内・学外ともに日本語だ。分からない時は簡単に言ってもらおう。

B1：大学内・学外ともに問題ない。

→全学習者とも日本語で行っているが、A2の「引越しなどは自力では無理だ」という意見は注目される。この学習者の場合、指導教官が助けてくれたが、このような教職員または友人の協力が得られない日本語能力が不十分な留学生の場合、大変な困難が予想される。地域のボランティア団体等も含めた、生活面での支援を考える必要がある。

③医者にかかった時、日本語で話したか

A1：日本語で話した。在住のタイ人が病気になった時は、市役所から依頼を受けて、自分が通訳をした。

A2：自分は医者にかかったことはないが、母が来日した際、病院に行った。自分が通訳した。面白かった。松本には自分の母国語を話せる医者がいたが、このキャンパス周辺にはいるかどうか分からない。

A3：ケガした時は日本人の友達と一緒にいき、その人が説明してくれた。歯医者は一で行っている。最初はお互い困っていたが、自分の歯や専門書を見せてもらって理解した。

B1：腱鞘炎にかかった時に行ったが、事前に専門書で調べて行ったので大丈夫だった。聞き取りもできた。歯医者もOKだった。

→全修了生が、医療に関してはそれほど大きな問題としていないようである。

④今までに周りの人とのコミュニケーションや生活面でトラブルがあったか

A1：特にない。日本人は早く話すので、日本語を聞くことが一番大変だ。

A2：ない。皆とても親切だ。一度、車でトラブルになりそうになった。事故を起こしそ

うになり、相手の若い人にかられるところだった。でも、自分の顔を見て相手がやめた。

A3：特にない。アパートでの一人暮らしも引越しも、特に問題なかった。近所の人への挨拶回りもした。大家は離れたところに住んでいるので会ったことがない。

B1：駐車場で事故を起こした時、その処理でとても困った。結局、車を買った、留学生に慣れている車販売店に頼んで、保険会社に連絡してもらった。また、PCのサービスセンターへの電話の際には、日本人学生に助けてもらった。自分でできたこともある。

→上述したように、人間関係に恵まれている修了生が多く、それほど深刻なトラブルは多くないようである。

#### ⑤トラブルの時、どうするか。相談できる人はいるか

A2：何か問題があったら、いつも先生に相談する。先生は、ほとんど第二の親だ。研修コースと一緒に勉強していた留学生が同じ学部にいるが、学科が違うためほとんど会わない。他の留学生とはあまり会わない。

A3：先生や日本人の友達や知り合いの日本人等に相談できる。出身国に関するボランティア・グループがあって、知り合いができた。その集まりには、できるだけ参加している。

B1：同国人の助手がいるので、生活面・研究面ともに相談できる。日本人より相談しやすい。

→先生を始め、数人の相談相手を持っているようだ。B1のように、同国人の助手という非常に頼れる相談相手を持っている者もいるが、留学生全体で見ただけの場合、これは非常に限られている。A3のように、地域のボランティアと関係ができて学外の日本人の知り合いができた場合、留学生も何らかの貢献ができ、日本人からも幅広い援助が得られ、お互いにいい関係になるケースが多い。

#### ⑥その他、話したいことはないか

A2：特にない。問題はない。

A3：特にない。食べ物にも慣れた。最近は忙しいので自分ではあまり料理を作らない。

B1：留学生センターでの勉強が終わってから、修了生同士の交流が少ないので、もっとあるといい。同期の学生や先生達に会いたい。

→特に話したいことや大きな問題は少ないようだ。B1があげた「研修コース修了後の交流」は、半年に一度の研修コース主催「おしゃべりパーティー」がその役割を果たしているが、遠くの町に分散している修了生が多く、一同に会することは困難である。

## 4. 考察および提言

以上のインタビューおよび修了生との自由会話の中で得られた情報をもとに、考察を述べていくことにする。

3-1⑦でA3が述べていた「どれだけ日本語学習を頑張っても、専門には使えない」という意見は、今後の研修コースでの日本語指導を考えるうえで、非常に重要なものだと

考える。これは単に一人の学習者の意見ではなく、今回のインタビューで分かった他の学習者の状況からも、これまでの研修コースの修了生の意見からも言えることである。修了生たちは、発表は周囲の助けを得ながら日本語を用いて行うようにしているが、指導教官との打合せや論文講読、論文執筆には日本語を使用していないか、または諦めている。指導教官が英語を理解できる、または専門分野の論文に英文のものが多いなど、英語ができる学習者であれば、日本語で研究を進めなければならない要素は少ないのである。逆に、専門分野の日本語での研究推進を妨げている要素としては、母国語では既習であっても、日本語では未習の専門用語をあらためて覚えなければならない点、聴解能力が不十分な点、加えて漢字の存在など数多くある。来日時点でゼロ学習者であった者が、半年の研修コースの指導を受けたとしても、これらの問題をクリアできるようになるとは、やはり言いがたい。研修コースでも、専門への橋渡しになるような指導を進めていきたいと考えているが、それが効果的に行えているとは言えない現状である。

おそらく、研修コースには、理系学部・研究科へ進学する学習者が多く受講するため、特にこのような傾向が見られるのであろう。文系学部・研究科に比して理系では英語使用がより一般的であり、むしろ英語使用が日本人学生にも勧められている状況である。そのような環境に、日本語能力が不十分で、英語能力がある留学生が入った場合、専門に関しては日本語を使用しなくなる可能性は非常に高い。3-1⑤でA1が「日本語で書きたいと思うが、時間がかかるので、英語で書いてしまう」と述べている点などが象徴的である。日本人学生も、「自分の英語の勉強になる」として、留学生の英語使用を積極的に許容する傾向が見られる。そのような状況があいまって、上述したような「専門での日本語の限界」を感じるようになるのではないか。

それでは、研修コース修了生にとって重要な日本語能力とは、どのようなものなのであろうか。それは、「日本人とスムーズにコミュニケーションする日本語能力」だと言うことができよう。3-2①でA1が「どんどん日本語で関係を持つようになって、友達も増えた」と述べているように、日本語でスムーズにコミュニケーションをとることができ、様々な話題について話し合うことができれば、確実に日本人学生の友人が増える。「自分の英語の勉強になる」と考えて英語使用を許容している日本人学生も、相手が、時には日本語で雑談ができ、日本語を使いながら遊ぶことができる相手であれば、より積極的に付き合うようになるだろう。それは、上述したように、留学生に精神的安定と日本での生活への充足感をもたらし、研究面にも好影響をもたらす。一方、全く日本語でのコミュニケーションがとれない留学生の場合、研究室の中でも「浮いて」しまい、精神的に追い詰められるケースがある。もちろん、その留学生の人間性も大きく関係してくることはあるが。今回インタビューを行った修了生達が人間関係に恵まれていることは、彼らが「専門には不十分だが、コミュニケーションするには十分な日本語能力」を有していることと大きく関係する。それすらなかった場合、彼らがこのような人間関係を持つことは困難だったであろう。

また、専門分野での研究を進める際にも、この「日本人とスムーズにコミュニケーションす

る日本語能力」は重要である。インタビューでもほとんどの学習者が述べていたように、「これは重要な内容だ」と考えた際、留学生は近くにいる日本人学生に質問する。その際に、英語でなく日本語で質問できれば、相手も答えやすく、より丁寧に答えてくれる可能性が高くなる。例え、専門分野の研究そのものを日本語で行えなくても、「日本人とスムーズにコミュニケーションする日本語能力」は彼らの研究を助けてくれるのである。

よって、日本語研修コースにまず第一に求められることは、日本人とスムーズにコミュニケーションする日本語能力養成であると考えられる。ここで、日本人とした場合、それが指導教官なのか学生なのかという問題が生じる。これについては、A2が3-2①で次のように述べている。「先生も友達のような気さくな人で丁寧な言葉を使わなくてもいい」。全ての指導教官がこの例に当てはまるわけではないことは言うまでもないが、現在は、多くの教官が、留学生に正確な敬語の使用までは求めていないと思われる。「です・ます」体が正確に使用できれば、誤った敬語使用よりはるかに丁寧であることは言うまでもなく、それで十分だと留学生に伝えている教官は多い。また、留学生は、教官との専門の打合せには英語を用いることが多く、その点も問題が少ない。さらに、専門分野の質問相手としても、日頃コミュニケーションする相手としても、その頻度が高いのは教官でなく日本人学生であろう。そのため、「日本人学生とスムーズにコミュニケーションできる日本語能力養成」という視点をコース運営に入れていく必要がある。

この能力を念頭においた際、現在の研修コースの指導で欠けているものは何であろうか。今回、インタビューと同時に行われたアンケート調査において、「研修コースでもっと勉強したかったこと、知りたかったこと」という質問に対し、修了生たちは以下のように記述していた。「日本人学生が使っているような日常の日本語(A2)」「日常生活で用いられる日本語(A3)」「日常生活のよく使う言葉(B1)」。また、彼らがコース修了後に述べたことに次のようなものがある。「学部に行ったら、研修コースで習った日本語じゃない日本語を聞いて、全然分からなかった」「友達と話していたら『そんな丁寧な言葉、やめて』と言われた」「です・ます体で話していると、友達になりづらい気がする」というものがある。どれも、日本人学生との接触を通じて彼らが得た重要な印象である。また、この期の修了生のみでなく多くの修了生の口から、日本人学生が使っている日本語、つまりインフォーマルな日本語理解に対する困難さが述べられている。このことから、現在の研修コースの指導に欠けているものは、「インフォーマル表現の指導」と言えるのではないだろうか。一般の日本人同士の付き合いにおいても、「ため口」と言われるインフォーマル表現を使うか使わないかによって、「知り合い」「親しい友達」といった区分けがなされている。これは留学生と日本人学生の間でも同様である。よって、留学生により多くの「親しい友達」を作らせ、精神的安定をもたらす、研究面の進展をもたらすためにも、「インフォーマル表現の指導」が重要であると言える。

さて、信州大学留学生センターの日本語研修コースで主教材とされている『みんなの日本語』では、第20課でインフォーマル表現が導入される。これは、普通体導入と同時に提

示され、会話文や練習文にはインフォーマル表現が現れる。しかし、この課の主目的は普通体導入であり、その後の普通体を用いた文型導入のための普通体の定着である。インフォーマル表現の習得を目的としているとは考えられない。それは、第20課以降、インフォーマル表現の会話・練習文が出てこないことから分かる。よって、主教材『みんなの日本語』に頼るのみでは、インフォーマル表現の導入、練習、定着はのぞめない。より新たな工夫が必要である。

ただし、本稿でいうインフォーマル表現には、流行りすたりの激しい流行語・若者語は含まないことにする。これらの指導もそれなりに有効ではあろうが、研修コースの短い時間内で行うことではないと考える。そこで、①「です・ます体」ではなく「である体(普通体)」、②終助詞、③学習を終えた文型の縮約形 の3つを研修コースで指導するインフォーマル指導項目としてはどうだろうか。これについては、今後、さらに議論を深めていきたい。

ところで、留学生へのインフォーマル指導を考える際に、どのような技能を考えるべきだろうか。発話、聴解、読解、手紙などの執筆のうち、どれが必要だろうか。全ての技能を修得させることがベストなのは言うまでもないが、半年間という短い時間内での習得を目指す場合、ある技能に焦点を合わせる必要性が生じる。この4つの技能のうち、まず導入、修得させるべきものは「聴解」ではないだろうか。日本人学生の発話中のインフォーマル表現を留学生が聞いて理解できなかった場合、そこでコミュニケーションが途切れる恐れがある。しかし、聴解さえできれば、例えインフォーマルの発話ができなくともコミュニケーションは継続するだろう。発話は、その後の日本人との交流を通じて少しずつ習得させればいいが、聴解に関しては、研修コース在籍中にある程度の水準にしておきたい。

そこで、今後の研修コースでの日本語指導においては、インフォーマルの聴解練習を新たに項目として加えていきたい。その方法として、まず考えられることは、主教材『みんなの日本語』の会話のインフォーマル版を作成することである。もちろん、インフォーマルにそぐわない課もあるため、全ての課でそのように作成することは不可能であるが、可能な課はインフォーマル版も作成し、学習者に提示していきたい。これは、各国語翻訳に手をつける必要もなく実施可能である。どのようなインフォーマル版を作成するかは、上述した3つの指導項目を参考に進めたい。これにより、留学生はインフォーマル表現に慣れることができ、少なくとも「コース修了後、初めて聞いた」という感想をそれほど抱かせずにすむであろう。さらに、会話だけでなく、練習Cなどもインフォーマル版を作成して練習させたい。加えて、教師から学習者への日本語を使った普段の話し掛けにも、意識してインフォーマル表現を入れることが大切だろう。教室活動を離れたところでこそ、インフォーマル表現は自然に用いられるのであり、学習者にたくさん聞かせ、理解させていく努力が必要である。もちろん、学習者の理解度をみながらインフォーマルに慣れさせる配慮も必要である。文型への根本的理解が不十分な状態で、さらにインフォーマル表現のシャワーを浴びせることは逆効果である。その判断は、現場の教師に任せたい。

インフォーマル表現の重要性の次に、主教材の使い方について述べたい。これまで、ゼロ学習者を対象にしたクラスでは、『みんなの日本語』の1課から一日1課のペースで指導していき、コース修了直前に50課を終えて修了テストというペースであった。『みんなの日本語』は、総合的に日本語能力を伸ばしていけるよう考えて作られた、ある程度バランスの取れた教材である。しかし、上述したような特殊な状況にある研修コースの受講生に対し、これを全て指導することは意味があることだろうか。むしろ、研修コースでの使用に際し、削るべきは削り、インフォーマル表現など不足している部分は独自に加える工夫が必要ではないだろうか。今後は、研修コースの全学習時間と照らし合わせながら、削る項目や加える項目、さらに十分に時間をかける項目を検討し、周到な予定表を作っていく必要があるだろう。すでに、研修コースでは、担当教官の調査と検討により、この教材に関する様々なデータが蓄積されている。これまで、それらのデータは有効に活用されてきたとは言い難かったが、今後はそれらをもとに、より効果的な主教材活用法を考案していく必要がある。

## 5. 問題点と今後の展望

今回は、インタビューを行った4名の修了生が全て理系の研究科進学予定であったため、考察も、理系進学予定の留学生を想定したものになった。今後も、本研修コースを受講する留学生は理系中心になる可能性が高いが、時には文系の学部・研究科への進学予定者も受講する可能性がある。ただ、そのような留学生が来ても、ゼロ学習者対象クラスではなく、初中級学習者対象クラスに配属される可能性が高いだろう。文系の学部・研究科で研究しようとして来日する学習者が、全くのゼロ学習者である可能性は低いからである。この初中級学習者対象クラスは、全く異なった別の工夫が必要なクラスであり、今回述べた内容がそのままあてはまるわけではない。

また、教員研修プログラムの留学生が、ゼロ学習者対象クラスに入ってくるケースはある。これは、それぞれの国で現職の教師または研究者が、半年の日本語指導の後、一年間、大学の教育学部に所属し、日本の教育現場を体験するというプログラムである。研修コース修了後の進学先は、ほぼ文系である教育学部で、指導教官も英語ができない場合があり、理系よりも英語使用の許容性は低いと予想される。しかし、このプログラムの主目的は日本の教育現場を体験することであり、日本語で論文を書いて学位をとることではない。指導教官との専門分野に関する打合せも、それほど頻繁には行われていないようである。よって、この教員研修生に、文系の学部・研究科進学予定の留学生を想定した日本語指導は必要ないのではないかと考える。むしろ、信州大学の日本語研修コース受講者の大半を占める、理系学部・研究科進学予定の留学生に焦点を当てるほうが妥当であろう。

なお、これまでに研修コース修了生に対する追跡調査は4回行われており、すでに2本の論文としてまとめられているが、これらの努力の積み重ねが、現実の研修コースでの日本語指導に反映されていないのではないかと指摘が多い。この追跡調査の目的が、研

修コースの質的向上にある以上、調査結果が反映されなければ意味がないことになってしまふ。今後は、この調査結果を厳粛に受け止め、コースに反映させる努力を怠らず、研修コースがマンネリに陥ることがないように注意していく必要がある。追跡調査には、研修コースの定期的なチェックを行い、その後のコースデザインの有効な修正につなげていく働きを期待したい。

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり、追跡調査グループの調査結果を利用した。このグループのメンバーである、留学生センター教員の下平菜穂・中村純子・金子泰子・合津美穂・今村一子の5名に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 中村純子ほか 2002 「平成12年度前期日本語研修コース修了生の追跡調査報告 一言語使用状況を中心に」『信州大学留学生センター紀要』第3号
- 下平菜穂ほか 2001 「日本語研修コース修了生の追跡調査 ー非漢字圏学習者のケーススタディー」『信州大学留学生センター紀要』第2号
- 佐藤尚子 1999 「千葉大学日本語研修コース修了生調査報告1」『千葉大学留学生センター紀要』第5号
- 広島大学留学生センター 1993 『日本語研修コース修了生実態調査報告書』
- 守山恵子・永井智香子・松本久美子 2000 「留学生の求めていること - 研修コース修了生インタビュー調査報告 - 」『長崎大学留学生センター紀要』第8号

